# 「花」というモチーフについて

今回の展覧会では数点、「花」をモチーフに作品を制作しています。
花を描く、という行為は私にとっては非常におっくうで気が重いものでした。
美術大学に進学するために美術予備校に通って、毎日同じような絵を描いていた私は絵が嫌いになっていました。
そんな状態で上手くなるわけもなく、ただただ時間を浪費し、苦手意識だけが募ったように思っている、そう思い込んでいる。一種のトラウマなのでしょう。
だから今も絵を描くことに関して劣等感を抱えながら描いているのです。まぁ、絵を描いている人は多少なりとも、方向性はそれぞれあれ、そういうものを抱えながらやっているように思うのですが。

その中でも「花」はうまく描けなかった最たるもので、苦手なものがすべて詰まっているようなモチーフでした。
複雑な形状とそれでいて整った規則性、それゆえの微妙な個々の変化が気になる、繊細さと色のバランス、高度で描き手それぞれの解釈が必要なものだと感じていました。他にも描くことが難しいものなんてごまんとありますが、私が進学を目指していた日本画の入試課題においては花や植物は絵の中でメイン、顔となるモチーフとして扱われることが多いので特にそう感じたのかなと思います。

そんな自分もこの春からご縁あり、美術予備校で講師をすることになりました。
基礎科という受験まではまだ間がある高校２年生までの生徒を指導しているのですが、そんな人間が教えていていいのかなという不安というか罪悪感というか、そういったものを抱えながらもちゃんとやってる、つもりです。
基礎科、というくらいなので受験絵画の基礎を教えるわけですがそういったことをしていると必然的に自分の受験時代の記憶というか実感みたいなものが蘇り、絵を描くときに常に頭によぎる受験期の後悔が少し違う形に変わっているような感覚があるのです。
指導する上で言葉にする一つひとつの要素が自分のやってきたことの答え合わせのようになっているのかもしれません。
もちろん全部がポジティブに変換されるわけではないですがその頃の自分に向き合うにはいいタイミングなのかなと今回は扱う気になった、という感じです。

そしてタイトルに関してはそれぞれ自分が聞いてきた花が関連した曲の歌詞から一節拝借しています。
よく聞いていたものもあればなんとなく聞き流していたものもあればという感じですが、音楽はその時期その時期の自分の心情と強く結びつけていると感じています。

同じように他の人には他の人のストーリーの中で寄り添うようにその曲は存在して、同じ花、同じ曲を受け取ってもおそらく感じることや景色は違うものになるはずです。

もう一つビジュアルの面では「レアカード」のような特別感をイメージとして入れ込んでいます。幼少の頃(といえないくらいまでの年齢まで集めていたかもしれないが…)触れていたゲームやアニメのカード、やはりレアなキラキラしたものを手に入れたときの嬉しさは格別で。といえやはりそれを手に入れるために買っても、基本的にはあまりいらない雑魚カードだらけになるのも必然で「あのお金、別の用途に使っていれば…」と思うこともないわけでもない。それでも引き当てたときの感動や驚きのようなものは他では代えがたい瞬間で、それが自分の絵の中に少しでもあるといいなと思ったわけです。多分絵画の形態になると感動のスピード感的にはもっとゆっくりで厳かな面が強くなってしまうとは思うのですが、それくらいに見たらなんか嬉しい、ラッキー！くらいの感覚があってもいいと思うのです。

今回の個展の一つのテーマは「その時々の自身の感情や記憶」としていますが、同時にわたしの作品は鑑賞者の記憶や感じる風景が作品を通して、重なりあうことも目的としています。
結局のところ、芸術作品は受け取る側の誰かがいないと成立しません。
そういった意味では原始的なコミュニケーションツールだと思ってますし、やり取りは直接ではないにしろ色々な人の記憶のレイヤーが複合的に折り重なるその瞬間に作品として完成するのが芸術作品なんだろうなと思いつつ、特に今回は制作しているところがあります。

財田翔悟